

日蓮大聖人御書全集

けんほうぼうしやう

顕謗法抄

新版
483
ゝ
508

頭謗法抄

こうちやう

ねん

弘長2年('62)

41歳

さい

ほんちやうしやもんちれんせん

本朝沙門日蓮撰す。

だいいち

はちだいいじごく

いんが

あ

だいに

むけんじごく

いんが

第一に八大地獄の因果を明かし、第二に無間地獄の因果

きやうじゆう

あ

だいさん

もんどうりやうけん

あ

だいし

の軽重を明かし、第三に問答料簡を明かし、第四に

ぎやうじやぐきやう

やうじん

あ

行者弘経の用心を明かす。

だいいち

はちだいいじごく

いんが

あ

第一に八大地獄の因果を明かさば、

だいいち

とうかつじごく

えんぶだい

ち

したいっせんゆじゆん

第一に等活地獄とは、この閻浮提の地の下一千由旬にあ

じごく

じゅうじょうさいとう

いちまんゆじゆん

なか

り。この地獄は、縦広齊等にして一万由旬なり。この中の

ざいにん

がいしん

抱

あいみ

いぬ

罪人は、たがいに害心をいだく。もしたまたま相見れば、犬

さる

会

おのおのくろがね

つめ

たが

と猿とのあえるがごとし。各鉄の爪をもつて互いに

掴

裂

けつにくすで

つ

ほね

つかみさく。血肉既に尽きぬれば、ただ骨のみあり。ある

ごくそつて

てつじよう

と

こうべ

あし

みなう

いは獄卒手に鉄杖を取つて、頭より足にいたるまで皆打

碎

しんたい

すな

りとう

ちくだく。身体くだけて沙のごとし。あるいは利刀をもつ

ぶんぶん

にく

蘇

て分々に肉をさく。しかれども、またよみがえり、よみが

じごく

じゆみよう

にんげん

ちゆうやごじゆうねん

えりするなり。この地獄の寿命は、人間の昼夜五十年をも

だいいちしてんのう

いちにちいちや

しおうてん

てんにん

じゆみよう

つて第一四王天の一日一夜として、四王天の天人の寿命

ごひやくさい

し おうてん

ごひやくさい

とうかつ じごく

いちにち いちや

五百歳なり。四王天の五百歳をこの等活地獄の一日一夜と

じゆみようごひやくさい

して、その寿命五百歳なり。

じごく

ごういん

いのち

断

この地獄の業因をいわば、ものの命をたつもの、この

じごく

お

けら

あり

か

あぶとう

こむし

ころ

もの

さんげ

地獄に墮つ。螻・蟻・蚊・虻等の小虫を殺せる者も、懺悔な

かなら

じごく

お

たと

針

ければ、必ずこの地獄に墮つべし。譬えば、はりなれども

みず

うえ

置

しず

さんげ

水の上におけば沈まざることなきがごとし。また懺悔すれ

さんげ

のち

かさ

つみ

つく

のち

さんげ

ども、懺悔の後に重ねてこの罪を作れば、後の懺悔にはこ

つみ消

たと

ごく

い

者

の罪きえがたし。譬えば、ぬすみをして獄に入りぬるものの、

へ

のち

ごめん

こうむ

ごく

い

かさ

しばらく経て後に御免を蒙って獄を出ずれども、また重ね

て盗みぬすをして獄ごくに入りぬれば、出いずることゆるされがたき許難がごとし。

されば、当世とうせいの日本国にほんこくの人は、上一人より下万民かみいちにん しもばんみんに至るいた

まで、この地獄じごくをまぬかるる人は一人もありがたかるべし。

いかに持戒じかいのおぼえをとれる持律じりつの僧そうたりとも、蟻あり・蝨しらみな

んどを殺ころさず、蚊か・虻あぶをあやまたざるべきか。いわんや、

その外、山野ほかの鳥さんや・鹿とり、江海しかの魚鱗こうかいを日々いろくずに殺すものをや。

いかにいわんや、牛うし・馬うま・人等ひととうを殺す者をや。

第二だいにに黒縄地獄こくじようじごくとは、等活地獄とうかつじごくの下したにあり。縦広じゆうこうは等活とうかつ

じごく

ごくそつ

ざいにん

ねってつ

ち

伏

ねつ

地獄のごとし。獄卒、罪人をとらえて熱鉄の地にふせて、熱

てつ なわ

み

墨 打

ねってつ おの

なわ したが

鉄の縄をもつて身にすみうつて、熱鉄の斧をもつて縄に随

切 裂 削

のこぎり

引

そう

おお

つてきりさきけずる。また鋸をもつてひく。また左右に大

くろがね

やま

やま

うえ

くろがね

はたほこ

た

てつ

なわ

いなる鉄の山あり。山の上に鉄の幢を立て、鉄の縄を

張

ざいにん

くろがね

やま

負

なわ

うえ

渡

なわ

はり、罪人に鉄の山をおおせて縄の上よりわたす。縄よ

お

砕

くろがね

鼎

お

い

煮

り落ちてくだけ、あるいは鉄のかなえに墮とし入れてに

く

かみ

とうかつじごく

く

じゅうばい

にんげん

らる。この苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり。人間の

いびやくさい

だいに

とうりてん

いちにちいちや

じゅういっせんさい

一百歳は、第二の忉利天の一日一夜なり。その寿一千歳な

てん

じゅういっせんさい

いちにちいちや

だいに

じごく

り。この天の寿一千歳を一日一夜として、この第二の地獄の

じゅみよういつせんさい

寿命一千歳なり。

せつしょう うえ

ちゅうとう

盗

重

者

殺生の上に、偷盗とてぬすみをかさねたるもの、この

じごく 墮

とうせい

ちゅうとう

物

うえ

もの

しゅ

地獄におつ。当世の偷盗のもの、ものをぬすむ上、物の主

ころ

じごく

お

を殺すもの、この地獄に墮つべし。

だいさん

しゅごうじごく

こくじようじごく

した

じゅうこう

かみ

第三に衆合地獄とは、黒縄地獄の下にあり。縦広は上の

おお

くろがね

やま

ふた

あいむ

ござ

めず

ごとし。多くの鉄の山、二つずつ相向かえり。牛頭・馬頭

とう ごくそつ

て

ぼう

と

ざいにん

か

やま

あいだ

い

等の獄卒、手に棒を取って罪人を駆って山の間に入らしむ。

とき

ふた

やませま

きた

あ

お

しんたい

ち

この時、両つの山迫り来って合わせ押す。身体くだけで、血

なが

ち

満

しゅじゅ

く

にんげん

にひやくさい

だいさん

流れて地にみつ。また種々の苦あり。人間の二百歳を第三の

やまてん いちにちいちや

てん じゆにせんさい

てん

夜摩天の一日一夜として、この天の寿二千歳なり。この天の

じゆ いちにちいちや

じごく じゆみようにせんさい

寿を一日一夜として、この地獄の寿命二千歳なり。

せつしよう ちゆうとう

つみ

うえ

じやいん

たにん

妻

おか

もの

殺生・偷盗の罪の上に、邪姪とて他人のつまを犯す者、

じごく

なか

お

とうせい

そうにじによ

たぶん

この地獄の中に墮つべし。しかるに、当世の僧尼士女、多分

つみ

おか

こと

そう

つみおお

じによ

おのおのたが

はこの罪を犯す。殊に僧にこの罪多し。士女は各々互いに

守

ひとめ

ゆえ

つみ

そう

まぼり、また人目をつつまざる故に、この罪をおかさず。僧

いちにん

ゆえ

いんよく

みごも

ちち

は一人ある故に姪欲ともしきところに、もし有身らば父

糾

顚

ひと

によにん

ただされあらわれぬべきゆえに、独りある女人をおかさず。

隠

たにん

つま

窺

隠

もしやかくると他人の妻をうかがい、ふかくかくれんと

思

とうせい

尊

そう

なか

おもうなり。当世のほかとうとげなる僧の中に、ことにこ

つみ

おお

覚

たぶん

とうせい

の罪また多くあるらんとおぼゆ。されば、多分は、当世

尊

そう

じごく

お

とうとげなる僧、この地獄に墮つべし。

だいし

きようかんじごく

しゅごう

した

じゅうこうさき

おな

第四に叫喚地獄とは、衆合の下にあり。縦広前に同じ。

ごくそつ

あくしよう

い

ゆみや

ざいにん

射

くろがね

獄卒、悪声を出だして、弓箭をもつて罪人をいる。また鉄

ぼう

こうべ

う

ねってつ

ち

走

の棒をもつて頭を打つて、熱鉄の地をはしらしむ。あるい

ねってつ

煎

棚

打

返

打

返

ざいにん

は熱鉄のいりだなに、うちかえしうちかえしこの罪人を

焙

くち

あ

沸

あかがね

湯

い

あぶる。あるいは口を開けて、わかる銅のゆを入るれば、

ごぞう

した

ただ

い

じゅみよう

にんげん

五臓やけて下より直ちに出ず。寿命をいわば、人間の

しひやくさい だいし とそつてん いちにちいちや とそつてん じゅ

四百歳を第四の都率天の一日一夜とす。また都率天の寿

しせんさい とそつてん しせんさい じゅ いちにちいちや

四千歳なり。都率天の四千歳の寿を一日一夜として、この

じごく じゅみようしせんさい

地獄の寿命四千歳なり。

じごく ごういん

せつしよう ちゅうとう じやいん うえ おんじゅ

この地獄の業因をいわば、殺生・偷盜・邪姪の上に、飲酒

さけ じごく お

とて酒のむもの、この地獄に墮つべし。

とうせい びく びくに うばそく うばい ししゅ おおざけ もの

当世の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の大酒なる者、

じごく くまぬか だいろん さけ さんじゅうろく とが

この地獄の苦免れがたきか。大論には、酒に三十六の失を

ぼんもうきよう しゅはい 勸 もの ごひやくしよう て

いだし、梵網経には、「酒杯をすすめる者、五百生に手な

み う 説 たも にんし しやく 蚯 蚓 体

き身と生まる」ととかせ給う。人師の釈には、「みみずてい

もの

の者となる」とみえたり。いわんや、酒をうりて人にあたえ

もの

たる者をや。いかにいわんや、酒に水を入れてうるものを

とうせい

ざいけ

ひとびと

じごく

く

免

や。当世の在家の人々、この地獄の苦まぬかれがたし。

だいご

だいきようかんじごく

きようかん

した

じゅうこうさき

おな

第五に大叫喚地獄とは、叫喚の下にあり。縦広前に同

く

そう

かみ

よつ

じごく

もろもろ

く

じゅうばい

じ。その苦の相は、上の四つの地獄の諸の苦に十倍して

おも

受

じゅみよう

ちようたん

い

にんげん

はつぴやくさい

重くこれをうく。寿命の長短を云わば、人間の八百歳は

だいご

けらくてん

いちにちいちや

てん

じゅはつせんさい

第五の化楽天の一日一夜なり。この天の寿八千歳なり。こ

てん

はつせんさい

いちにちいちや

じごく

じゅみようはつせんさい

の天の八千歳を一日一夜として、この地獄の寿命八千歳な

り。

せつしょう

ちゅうとう

じやいん

おんじゅ

じゅうざい

かみ

もうご

殺生・偷盜・邪淫・飲酒の重罪の上に、妄語とて

虚言

もの

じごく

お

どうせい

しよにん

そらごとせる者、この地獄に墮つべし。当世の諸人は、た

けんじん

しやうにん

言

ひとびと

もうご

とき

とい賢人・上人などいわるる人々も、妄語せざる時はあ

もうご

ひ

ひ

りとも、妄語をせざる日はあるべからず。たとい日はあり

つき

つき

とし

とも、月はあるべからず。たとい月はあるとも、年はある

とし

いちごしやうもうご

もの

べからず。たとい年はありとも、一期生妄語せざる者はあ

とうせい

しよにん

いちにん

じごく

るべからず。もししからば、当世の諸人、一人もこの地獄を

免

まぬかれがたきか。

だいろく

しやうねつじごく

だいきやうかんじごく

した

じゅうこうさき

第六に焦熱地獄とは、大叫喚地獄の下にあり。縦広前

じごく しゅじゅく

じごく まめ

におなじ。この地獄に種々の苦あり。もしこの地獄の豆ば

ひ えんぶだい 置

いちじ 焼

かりの火を閻浮提におけらんに、一時にやけ尽きなん。い

ざいにん み やわ

綿

わんや、罪人の身の栗らかなることわたのごとくなるをや。

じごく ひと

さき いつ

じごく ひ み

ゆき

この地獄の人は、前の五つの地獄の火を見ること雪のごと

たと

にんげん

ひ

たきぎ

ひ

くろがねあかがね

ひ あつ

し。譬えば、人間の火の、薪の火よりも鉄 銅の火の熱

じゅみよう

ちようたん

にんげん

せんろつぴやくさい

だいろうく

きがごとし。寿命の長短は、人間の千六百歳を第六の

たけてん

いちにちいちや

てん

じゅいちまんろくせんさい

他化天の一日一夜として、この天の寿一万六千歳なり。こ

てん

いちまんろくせんさい

いちにちいちや

じごく

じゅみよう

の天の一万六千歳を一日一夜として、この地獄の寿命

いちまんろくせんさい

一万六千歳なり。

業因ごういんを云いわば、殺生せつしよう・偷盜ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうごの上、邪見かみ じゃけん

いんが

もの

なか

お

じゃけん

とて因果なしという者、この中に墮おつべし。邪見とは、あ

ひとい

ひとう

し

てん

う

とううんぬん

る人云わく「人飢えて死ぬれば、天に生まるべし」等云々。

そう

いんが

もの

じゃけん

もう

せけん

法

総じて、因果をしらぬ者を邪見と申すなり。世間のほうに

じひ

もの

じゃけん

もの

とうせい

ひとびと

じごく

は、慈悲なき者を邪見の者という。当世の人々、この地獄を

まぬか

免れがたきか。

だいしち

だいしようねつじごく

しようねつ

した

じゆうこうさき

第七に大焦熱地獄とは、焦熱の下にあり。縦広前のご

さき

むつ

じごく

いつさい

しよく

じゆうばい

おも

う

とし。前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受くる

じゆみよう

はんちゆうこう

なり。その寿命は半中劫なり。

ごういん

い

せつしょう

ちゅうとう

じやいん

おんじゆ

もうご

じやけん

業因を云わば、殺生・偷盗・邪姪・飲酒・妄語・邪見の

かみ

じようかい

びくに

犯

もの

なか

お

上に、淨戒の比丘尼をおかせる者、この中に墮つべし。ま

びく

さけ

ふじやいんかい

たも

ふによ

誑

た比丘、酒をもつて不邪姪戒を持てる婦女をたぼらかし、

ざいもつ

おか

もの

なか

お

とうせい

あるいは財物をあたえて犯せる者、この中に墮つべし。当世

そう

なか

おお

じゅうざい

だいひきよう

もん

まつだい

の僧の中に多くこの重罪あるなり。大悲經の文に「末代に

じによ

おお

てん

しょう

そうに

おお

じごく

お

は士女は多くは天に生じ、僧尼は多くは地獄に墮つべし」

説

体

こころ

ひとびと

恥

ととかれたるは、これていのか。心あらん人々は、はず

べし、はずべし。

そう

かみ

しちだいじごく

ごういん

しよきようろん

かんが

総じて、上の七大地獄の業因は、諸經論をもつて勘え

とうせいにほんこく

ししゆ

当　　み

しちだいじごく

離

当世日本国の四衆にあて見るに、この七大地獄をはなるべ

ひと

み

聞

ねはんぎよう

い

まつだい

い

き人を見ず、またきかず。涅槃経に云わく「末代に入つて、

にんげん

しょう

もの

そうじよう

ど

さんあくどう

お

人間に生ぜん者は、爪上の土のごとし。三悪道に墮つる

じつぽうせかい

みじん

と

ものは、十方世界の微塵のごとし」と説かれたり。もしし

われ

ふ　　ぼ

きようだいとう

し

ひと

みな

かみ

しちだい

からば、我らが父母・兄弟等の死ぬる人は、皆、上の七大地

じごく

お

たま

そうろう

浅

地獄にこそ墮ち給いては候らめ。あさましともいうばか

りゆう

じや

きじん

ほとけ

ぼさつ

しょうにん

りなし。竜と蛇と鬼神と、仏・菩薩・聖人をば、いまだ

み

音

聞

とうせい

かみ

しちだいじごく

ごう

見ず、ただおとにのみこれをきく。当世に上の七大地獄の業

つく

み

音

聞

を造らざるものをば、いまだ見ず、またおとにもきかず。

しかるに、我が身よりはじめて一切衆生、七大地獄に墮お

思

ものいちにん

ことば

お

つべしとおもえる者一人もなし。たとい言には墮つべき

由

轉

ころ

お

思

よしをさえずれども、心には墮つべしともおもわず。また

そうにじによ

じごく

ごう

おか

思

じぞう

僧尼士女、地獄の業をば犯すとはおもえども、あるいは地蔵

ぼさつとう

ぼさつ

しん

あみだぶつとう

ほとけ

たの

菩薩等の菩薩を信じ、あるいは阿弥陀仏等の仏を恃み、あ

しゅじゅ

ぜんこん

しゅ

もの

みな

思

われ

るいは種々の善根を修したる者もあり。皆おもわく「我は

ぜんこん

持

打

思

じごく

怖

かかる善根をもてれば」なんどうちおもいて、地獄をもおじ

ず。

しゅうじゅう

なら

ひとびと

おのおの

ちぶん

恃

あるいは宗々を習える人々は、各々の智分をたのみて、

じごく いん 怖

ぶつぼさつ しん

また地獄の因をおじず。しかるに、仏菩薩を信じたるも、

あいし ふうふ

愛 ふぼ しゅくん

敬

愛子・夫婦などをあいし父母・主君などをうやまうに

うんでい

ぶつぼさつとう

軽

思

は、雲泥なり。仏菩薩等をばかるくおもえるなり。されば、

とうせい ひとびと

ぶつぼさつ

たの

しゅうじゅう がく

当世の人々の「仏菩薩を待みぬれば、宗々を学したれば、

じごく く

免

思

びやくあん

地獄の苦はまぬかれなん」なんどおもえるは、僻案にや。

こころ

ひとびと

量

思

心あらん人々は、よくよくはかりおもうべきか。

だいはち だいあびじごく

むけんじごく

もう

よっかい

第八に大阿鼻地獄とは、または無間地獄と申すなり。欲界

さいてい だいしようねつじごく

した

じごく

じゅうこうはちまんゆじゅん

の最底、大焦熱地獄の下にあり。この地獄は縦広八万由旬

そと しちじゅう

くろがね

じょう

じごく

ごつく

なり。外に七重の鉄の城あり。地獄の極苦は、しばらく

りやく

さき

しちだいじごく

べつしよ

いっさい

しよく

くこれを略す。前の七大地獄ならびに別処の一切の諸苦を

いちぶん

だいあびじごく

くいっせんばいすぐ

もつて一分として、大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり。この

じごく

ざいにん

だいしようねつじごく

ざいにん

み

たけじぎいてん

地獄の罪人は、大焦熱地獄の罪人を見ることが、他化自在天

たの

じごく

か

臭

ひと嗅

の楽しみのごとし。この地獄の香のくささを人かぐならば、

してんげ

よっかい

ろくてん

てん

にん

みな死

しゅっせん

四天下・欲界の六天の天・人、皆ししなん。されども、出山・

もっせん

もう

やま

じごく

くさ

き

にんげん

きた

没山と申す山、この地獄の臭き気をおさえて人間へ来らせ

ゆえ

せかい

ものし

み

ほとけ

ざるなり。故に、この世界の者死せずと見えぬ。もし、仏、

じごく

く

と

たま

ひとき

ち

吐

この地獄の苦をつぶさに説かせ給わば、人聴いて血をはい

し

ゆえ

ほとけと

たま

見

て死すべき故に、くわしく仏説き給わずとみえたり。

むけんじごく　じゅみよう　ちようたん　いつちゆうこう　いつちゆうこう

この無間地獄の寿命の長短は一中劫なり。一中劫と

もう　にんじゅむりようさい　ひやくねん　いちじゅ　げん

申すは、この人寿無量歳なりしが、百年に一寿を減じ、ま

ひやくねん　いちじゅ　げん　にんじゅじっさい　とき　げん

た百年に一寿を減ずるほどに、人寿十歳の時に減ずるを

いちげん　もう　じっさい　ひやくねん　いちじゅ　ぞう　ひやくねん

一減と申す。また十歳より百年に一寿を増し、また百年に

いちじゅ　ぞう　はちまんさい　ぞう　いちぞう　もう

一寿を増するほどに、八万歳に増するを一増と申す。この

いちぞういちげん　しょうこう　にじゅう　ぞうげん　いつちゆうこう

一増一減のほどを小劫として、二十の増減を一中劫とは

もう　じごく　お　もの　ほどひさ　むけんじごく

申すなり。この地獄に堕ちたる者、これ程久しく無間地獄に

じゅう　だいく　受

住して、大苦をうくるなり。

い　い　い　ぎやくざい　つく　ひと　じごく　お

業因を云わば、五逆罪を造る人、この地獄に堕つべし。

ごぎやくざい もう いち せつぶ に せつも さん せつあらかん し

五逆罪と申すは、一に殺父、二に殺母、三に殺阿羅漢、四

すいぶつしんけつ ご はわごうそう いま よ ほとけ

に出仏身血、五に破和合僧なり。今の世には仏ましまさず。

すいぶつしんけつ わごうそう はわごうそう

しかれば出仏身血あるべからず。和合僧なければ、破和合僧

あらかん せつあらかん せつぶ せつも

なし。阿羅漢なければ、殺阿羅漢これなし。ただ殺父・殺母

つみ おうぼう 戒 嚴

の罪のみありぬべし。しかれども、王法のいましめきびし

つみ 犯 どうせい

くあるゆえに、この罪おかしがたし。もししからば、当世に

あびじごく お ひと そうじ ごぎやくざい

は阿鼻地獄に墮つべき人すくなし。ただし、相似の五逆罪

もくえ ぶつぞう どうとうとう 焼 ぶつぞうとう きしん

これあり。木画の仏像・堂塔等をやき、かの仏像等の寄進の

ところ 奪 そと ばとう 切 焼 ちじん ころ

所をうばいとり、率兜婆等をきりやき、智人を殺しなにと

するもの多し。おこれらは大阿鼻地獄の十六の別処に墮つべし。だいあびじごく　じゅうろく　べっしよ　おされば、当世の衆生、十六の別処に墮つるもの多きとうせい　しゅじよう　じゅうろく　べっしよ　おし。ほうぼう　もの　じごく　おまた、謗法の者、この地獄に墮つべし。か。　また、　謗法の者、　この地獄に墮つべし。

第二に無間地獄の因果の軽重を明かさば、だいに　むけんじごく　いんが　きようじゆう　あ問うて云わく、五逆罪より外の罪によりて、と　い　ごぎやくざい　ほか　つみ　むけんじごく無間地獄に墮ちんことあるべしや。お　墮ちんことあるべしや。

答えて云わく、誹謗正法の重罪なり。こた　い　ひぼうしやうほう　じゅうざい問うて云わく、証文いかん。と　い　しょうもん

こた い ほけきょうだいに い ひとしん
答えて云わく、法華經第二に云わく「もし人信ぜずして、

きょう きぼう ないし ひと みようじゅう あびごく い
この経を毀謗せば乃至その人は命終して、阿鼻獄に入ら

とうんぬん もん ほうぼう あびじごく ごう み
ん」等云々。この文に、謗法は阿鼻地獄の業と見えたり。

と い ごぎやく ほうぼう つみ きようじゅう
問うて云わく、五逆と謗法と、罪の軽重いかん。

こた い だいばんぎょう い しやりほつ ほとけ もう
答えて云わく、大品經に云わく「舍利弗、仏に白して言

せそん ごぎやくざい はほうざい あいに ほとけ しやりほつ
さく『世尊よ。五逆罪と破法罪と相似るや』。仏、舍利弗

っ まさ あいに い ゆえん
に告げたまわく『応に相似ると言うべからず。所以はいか

はんにははらみつ やぶ すなわ じっぽうしよぶつ いっさい
ん。もし般若波羅蜜を破らば、則ちこれ十方諸仏の一切

ち いっさいしゅち やぶ ぶっぽう やぶ ゆえ ほうほう やぶ ゆえ
智・一切種智を破る。仏宝を破るが故に、法宝を破るが故に、

そうほう やぶ ゆえ さんぽう やぶ ゆえ すなわ せけん しょうけん
僧宝を破るが故に。三宝を破るが故に、則ち世間の正見を
やぶ せけん しょうけん やぶ すなわ むりようむへんあそうぎ つみ
破る。世間の正見を破れば○則ち無量無辺阿僧祇の罪を
う むりようむへんあそうぎ つみ えお すなわ むりようむへん
得。無量無辺阿僧祇の罪を得已われれば、則ち無量無辺
あそうぎ うく う もん
阿僧祇の憂苦を受く』と」文。

い はほう ごう いんねん あつ ゆえ むりよう
また云わく「破法の業因縁集まるが故に、無量
ひやくせんまんおくさい だいじごく なか お はほうにん やから
百千万億歳、大地獄の中に墮つ。この破法人の輩、
いちだいじごく いちだいじごく いた ごうかお とき たほう
一大地獄より一大地獄に至る。もし劫火起こる時は、他方の
だいじごく なか いた じっぽう あまね か あいだ
大地獄の中に至る。かくのごとく十方に遍く、彼の間に
ごうかお ゆえ し はほう ごういんねん っ
劫火起こるが故にかしこより死し、破法の業因縁いまだ尽

きざるが故にこの間の大地獄の中に還来す」等云々。
ゆえ あいだ だいじごく なか げんらい とううんぬん

法華經第七に云わく「四衆の中に、瞋恚を生じて心不淨
ほけきようだいしち い ししゆ なか しんに しょう こころふじよう

なる者有つて、悪口・罵詈して言わく『この無智の比丘』
ものあ あつく めり のたま むち びく

と。あるいは杖木・瓦石をもつて、これを打擲す乃至千劫、
じようもく がしやく ちようちやく ないしせんごう

阿鼻地獄において、大苦悩を受く」等云々。この經文の心
あびじごく だいくのう とううんぬん きようもん こころ

は、法華經の行者を悪口しおよび杖をもつて打擲せるも
ほけきよう ぎようじゃ あつく つえ ちようちやく

の、その後には懺悔せりといえども、罪いまだ滅せずして、
のち さんげ つみ めつ

千劫、阿鼻地獄に堕ちたりと見えぬ。
せんじう あびじごく お み

懺悔せる謗法の罪すら、五逆罪に千倍せり。いわんや、
さんげ ほうぼう つみ ごぎやくざい せんばい

さんげ

ほうぼう

あびじごく

い

ご

難

懺悔せざらん謗法においては、阿鼻地獄を出ずる期かたか

ゆえ

ほけきようだいに

い

きよう

どくじゆ

しよじ

るべし。故に、法華經第二に云わく「經を讀誦し書持する

もの

み

きようせんぞうしつ

けつこん

いだ

ないし

ことあらん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん乃至そ

ひと

みようじゆう

あびごく

い

いつこう

ぐそく

こうつ

の人は命終して、阿鼻獄に入らん。一劫を具足して、劫尽

う

てんでん

むしゅこう

きなば、さらに生まれん。かくのごとく展轉して、無數劫に

いた

とううんぬん

至らん」等云々。

だいさん

もんどうりようけん

あ

第三に問答料簡を明かさば、

と

い

ごぎやくざい

ほうぼうざい

きようじゆう

知

問うて云わく、五逆罪と謗法罪との輕重はしんぬ。

ほうぼう　　そうみよう

謗法の相貌いかん。

こた　い　てんだいちしゃだいし　ぼんもうきよう　しよ　い　ぼう

答えて云わく、天台智者大師の梵網經の疏に云わく「謗

そむ　とううんぬん　ほう　そむ　ほうぼう　てんじん

とは背くなり」等云々。法に背くが謗法にてはあるか。天親

ぶつしょうろん　い　ぞうはい　とううんぬん　もん　こころ

の仏性論に云わく「もし憎背せば」等云々。この文の心は、

しょうほう　ひと　す　ほうぼう

正法を人に捨てさするが謗法にてあるなり。

と　い　い　さい　そうみよう　知　思　粗　々

問うて云わく、委細に相貌をしらんとおもう。あらあら

示

しめすべし。

こた　い　ねはんぎようだいご　い　ひとあ　によらい

答えて云わく、涅槃經第五に云わく「もし人有つて如来は

むじよう　い　い　ひと　しただらく　とう

無常なりと言わば、いかなぞ、この人、舌墮落せざらん」等

うんぬん

もん

こころ

ほとけ

むじよう

ひと

しただらく

云々。この文の心は、仏を無常といわん人は舌墮落すべしと云々。

と

い

もろもろ

しようじようきよう

ほとけ

むじよう

と

問うて云わく、諸の小乗経に、仏を無常と説かる

うえ

け

しゆ

みなむじよう

だん

る上、また化するとところの衆、皆無常と談じき。もししか

ほとけ

け

しゆ

した

だらく

らば、仏ならびに化するとところの衆の舌、墮落すべしや。

こた

い

しようじようきよう

ほとけ

しようじようきよう

ひと

むじよう

答えて云わく、小乗経の仏を小乗経の人が無常と

説

だん

した

爛

だいじようきよう

む

ほとけ

とき談ずるは、舌ただれざるか。大乘経に向かつて仏を

むじよう

だん

しようじようきよう

たい

だいじようきよう

は

した

無常と談じ、小乗経に対して大乘経を破するが、舌は

だらく

思

己

えきよう

したが

墮落するか。これをもつておもうに、おのれが依経には随

えきよう

勝

きよう

は

はほう

えども依経よりすぐれたる経を破するは、破法となるか。

かんぎよう

けこんぎようとう

ごんだいじようきよう

ひとびと

もししからば、たとい観経・華嚴経等の権大乘経の人々、

よ

きよう

もん

しゆぎよう

きよう

依るところの経の文のごとく修行すとも、かの経にすぐ

きようぎよう

したが

よし

だん

ほうぼう

れたる経々に随わず、またすぐれざる由を談ぜば、謗法

かんぎようとう

きよう

ほう

得

となるべきか。されば、観経等の経のごとく法をえたり

かんぎようとう

は

きよう

しゆつたい

とき

きよう

したが

とも、観経等を破せる経の出来したらん時その経に随

はほう

しようじようきよう

擬

わずば、破法となるべきか。小乗経をもつてなぞらえて

こころ得

心うべし。

と

い

そうかんぎようとう

ないしじゆうねん

すなわ

問うて云わく、双観経等に「乃至十念するに、即ち

おうじよう

え

説

そうろう

か

教

往生することを得ん」なんどとかれて候が、彼のきよう

おし

じゅうねんもう

おうじよう

のち

きよう

の教えのごとく十念申して往生すべきを、後の経をもつ

もう

破

ほうぼう

そうろう

て申しやぶらば、謗法にては候まじきか。

こた

い

ほとけ

かんぎようとう

しじゅうよねん

きようぎよう

つか

答えて云わく、仏、觀經等の四十余年の経々を束ね

みけんしんじつ

と

たま

きようもん

したが

て「未顕真実」と説かせ給いぬれば、この経文に随つて、

ないしじゅうねん

すなわ

おうじよう

え

とう

じつ

『乃至十念するに、即ち往生することを得ん』等は、実

おうじよう

もう

きようもん

ほうぼう

には往生しがたし」と申す。この経文なくば、謗法とな

るべし。

と

い

ひとい

むりようぎきよう

しじゅうよねん

問うて云わく、ある人云わく「無量義經の『四十余年に

しんじつ

あらわ

もん

しじゅうよねん

いつさい

はいまだ真実を顕さず』の文は、あえて四十余年の一切の

きようぎよう

もんもんくく

みな

みけんしんじつ

と

たも

経々ならびに文々句々を、皆『未顕真実』と説き給うに

しじゅうよねん

きようぎよう

しよしよ

けつじようしよう

にじよう

はあらず。ただ四十余年の経々に、処々に決定性の二乗

なが

ぞうぶつ

嫌

たま

しゃかによらい

はじ

を『永く成仏せず』ときらわせ給い、釈迦如来を『始めて

しようかく

じよう

と

たま

ことば

指

正覚を成ず』と説き給いしを、その言ばかりをさして

みけんしんじつ

もう

よじ

『未顕真実』とは申すなり。あえて余事にはあらず。しか

しじゅうよねん

もん

み

かんぎようとう

ぼんぷ

るを、みだりに『四十余年』の文を見て、観経等の凡夫の

くほんおうじよう

と

おうじよう

ために九品往生などを説きたるを、みだりに『往生は

おもう

恐

ほうぼう

もの

なきことなり』なんと押し申す。あにおそろしき謗法の者に

あらずや」なんど申すは、いかに。もう

こた い 答えて云わく、この料簡は、東土の得一が料簡に似た

とくいち い り。得一が云わく『未顕真実』とは、決定性の二乗を、
みけんしんじつ けつじようしやう にじやう

ほとけ にぜん きやう 仏、爾前の経にして『永く成仏せず』ととかれしを、
なが じやうぶつ 説

しんじつ きら 真実』とは嫌わるるなり。前四味の一切には亘るべからず」
ぜんし み いっさい わた

もう と申しき。伝教大師は、前四味に亘つて、文々句々に「未顕
でんぎやうだいし ぜんし み わた もんもんくく みけん

しんじつ た たま 真実」と立て給いき。されば、この料簡は古の謗法の者
りやうけん に りようけん いにしえ ほうぼう もの

の料簡に似たり。
りやうけん

ただし、しばらく汝等が料簡に随つて尋ね明らめん。問
なんだち りやうけん したが たず あき と

ほつけいぜん にじようさぶつ きら

いま みけんしんじつ

う。「法華已前に二乗作仏を嫌いけるを、今『未顕眞実』と

けつじようしよう にじよう ほとけ なが じようぶつ

いう」となれば、まず決定性の二乗を仏の「永く成仏せ

説 たま しよしよ きようもん みけんしんじつ ほとけ

ず」ととかせ給いし処々の經文ばかりは、「未顕眞実」の仏

もうご しようぶく たも ほとけ もうご もちろん

の妄語なりと承伏せさせ給うか。さては仏の妄語は勿論

もうご ひと もう うむとも もち

なり。もししからば、妄語の人の申すことは、有無共に用い

けつじようしよう にじよう なが じようぶつ

ぬことにてあるぞかし。「決定性の二乗は永く成仏せず」

ことば もうご よ ぼさつ ぼんぷ おうじよう じようぶつ

の語ばかり妄語となり、もし余の菩薩・凡夫の往生・成仏

とう じつご しんよう たと

等は実語となるべきならば、信用しがたきことなり。譬え

とうほう さいほう もうご ひと さいほう とうほう もう

ば、東方を西方と妄語し申さん人は、西方を東方と申すべ

し。「二乗は永く成仏せず」と説く仏は、余の菩薩の成仏

許

もうぐい

ごじよう

いちぶつしよう

をゆるすも、また妄語にあらずや。五乗はただ一仏性なり。

にじよう

ぶつしよう

隠

ぼさつ

ぼんぷ

ぶつしよう

著

かえ

二乗の仏性をかくし、菩薩・凡夫の仏性をあらわすは、返

ぼさつ

ぼんぷ

ぶつしよう

つて菩薩・凡夫の仏性をかくすなり。

ひとい

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

ある人云わく『四十余年にはいまだ真実を顕さず』と

じようぶつ

どう

みけんしんじつ

おうじようとう

みけんしんじつ

は、成仏の道ばかり未顕真実なり。往生等は未顕真実に

はあらず。』

なん

い

しじゅうよねん

あいだ

せつ

じようぶつ

みけん

また難じて云わく、四十余年が間の説の成仏を「未顕

しんじつ

しようぶく

たま

そうかんぎよう

い

しようがく

と

真実」と承伏せさせ給わば、双観経に云う「正覚を取ら

じようぶつ

このかた

じつこう

ふ

とう

もん

みけん

じ」「成仏してより已来、およそ十劫を歴」等の文は「未顕

しんじつ

しようぶく

たも

しじゅうよねん

真実」と承伏せさせ給うか。もししからば、四十余年の

きようぎよう

ほうぞうぶく

あみだぶつ

成

たま

ほうぞう

経々にして法蔵比丘の阿弥陀仏になり給わずば、法蔵

びく

じようぶつ

もうご

じようぶつもうご

比丘の成仏すでに妄語なり。もし成仏妄語ならば、いず

ほとけ

ぎようじゃ

むか

たも

れの仏か行者を迎え給うべきや。

なん

つう

い

しじゅうよねん

あいだ

また、かれ、この難を通じて云わく、「四十余年が間は

じようぶつ

あみだぶつ

いま

じようぶつ

かこ

成仏はなし。阿弥陀仏は今の成仏にはあらず、過去の

じようぶつ

とううんぬん

成仏なり」等云々。

いまなん

い

こんにち

しじゅうよねん

きようぎよう

じつ

今難じて云わく、今日の四十余年の経々にして実の

ぼんぷ じようぶつ ゆる かこおんのんごう しじゅうよねん ごんきよう

凡夫の成仏を許されずば、過去遠々劫の四十余年の権經

じようぶつかな さんぜ しよぶつ せつぼう ぎしき みなおな

にても成仏叶いがたきか。三世の諸仏の説法の儀式、皆同

ゆえ

じきが故なり。

い と むじようぼだい じよう え

あるいは云わく『疾く無上菩提を成ずることを得ず』

説 しじゅうよねん きようぎよう と ほとけ 成

ととかるれば、四十余年の経々にては疾くこそ仏にはな

おそ こう へ 成

らねども、遅く劫を経てはなるか。

なん い つぎしも だいしようごんぼさつとう りようげ い

難じて云わく、次下の大莊嚴菩薩等の領解に云わく

ふかしぎむりようむへんあそうぎこう す つい むじようぼだい

「不可思議無量無辺阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提

じよう え とう うんぬん もん

を成ずることを得ず」等と云々。この文のごとくならば、

こうへにぜんきよう

じようぶつ 難

劫を経て、爾前の経ばかりにては成仏はかたきか。

あるいは云う。い 華嚴宗の料簡に云わくけこんしゅう りようけん い「四十余年の内に

は、華嚴経ばかりは入るべからず。けこんぎよう 華嚴経にすでに往生・

成仏これあり。じようぶつ なんぞ華嚴経を行じて往生・成仏をとげ

ざらん」。

答えて云わく、こた い「四十余年の内に華嚴経入るべからず」と

は、華嚴宗の人師の義なり。けこんしゅう にんし ぎ 無量義経には、正しく四十余年

の内に「華嚴海空」と名目を呼び出だして、四十余年の内うち けこんかいこう みようもく よ い しじゅうよねん うち

にかずえ入れられたり。数 い 人師を本とせば、にんし もと 仏に背くになり

ぬ。

と

い

ほけきよう

離

おうじよう

じようぶつ

遂

問うて云わく、法華經をはなれて往生・成仏をとげず

ほとけよ い

たま

ほけきよう

と

ば、仏世に出でさせ給いては、ただ法華經ばかりをこそ説

たま

煩

しじゅうよねん

きようぎよう

と

かせ給わめ。なんぞわずらわしく四十余年の經々を説か

たも

せ給うや。

こた

い

なん

ほとけみずか

こた

たま

答えて云わく、この難は仏自ら答え給えり。「もしただ

ぶつじよう

ほ

しゅじよう

く

もつ

ほう

は

しん

仏乗を讃むるのみならば、衆生は苦に没し、法を破して信

ゆえ

さんあくどう

お

とう

きようもん

ぜざるが故に、三悪道に墜ちなん」等の經文これなり。

と

い

にぜん

きよう

しゅじようぼう

問うて云わく、いかなれば、爾前の經をば衆生謗ぜざ

るや。

こた

い

にぜん

きようぎよう

ばんさ

つか

答えて云わく、爾前の経々は万差なれども、束ねてこ

ろん

ずいたい

もう

しゅじよう

こころ

説

れを論ずれば、随他意と申して衆生の心をとかれてはん

ゆえ

い

たと

みず

いし

投

べり。故に違することなし。譬えば、水に石をなぐるに

争

品

々

せつきよう

あらそうことなきがごとし。またしなじなの説教はんべれ

くかい

しゅじよう

こころ

い

しゅじよう

こころ

みな

ぜん

ども、九界の衆生の心を出でず。衆生の心は皆、善に

あく

まよ

もと

ほとけ

成

つけ悪につけて、迷いを本とするゆえに、仏にはならざる

か。

と

い

しゅじようぼう

ほとけ

さいしよ

ほけきよう

問うて云わく、衆生謗すべきゆえに、仏、最初に法華経

説 たま

しじゅうよねん のち ほけきよう

たま

なんじ

をととき給わずして四十余年の後に法華經をととき給わば、汝、

とうせい ごんきよう

説

そう

ほけきよう

なんぞ当世に権經をばとかずして左右なく法華經をとい

ひと ぼう

あくどう お

て、人に謗をなさせて惡道に墮とすや。

こた

い

ほとけざいせ

ほとけ

ぼだいじゆ

もと

ざ

たま

答えて云わく、仏在世には、仏、菩提樹の下に坐し給い

き 鑑 たも

とうじ

ほけきよう

と

しゆじようぼう

て機をかがみ給うに、「当時、法華經を説くならば、衆生謗

あくどう

お

しじゅうよねん

のち

説

ぼう

じて惡道に墮ちぬべし。四十余年すぎて後にとかば、謗ぜ

しよじゅうふたい

ないしみようかく

登

ちけん

ずして、初住不退、乃至妙覺にのぼりぬべし」と知見し

ましましき。

まつだいじよくせ

とうき

しよじゅう

くらい

い

ひと

まん

末代濁世には、当機にして初住の位に入るべき人は、万

いちにん

有 難

に一人もありがたかるべし。また、能化の人も仏にあらざ

のうけ

ひと

ほとけ

き 鑑

難

ぎやくえん

れば、機をかがみんことも、これかたし。されば、逆縁・

じゆんえん

ほけきよう

と

ほとけ

たま

順縁のためにまず法華経を説くべしと、仏ゆるし給えり。

めつご

とうきしゆ

ただし、また滅後なりとも、当機衆になりぬべきものには、

ごんきよう

説

まず権経をとくこともあるべし。

ひ さき

ひと

ごんきよう

説

しやかぶつ

また、悲を先とする人は、まず権経をとく。釈迦仏のご

じ さき

ひと

じつきよう

ふきようばさつ

とし。慈を先とする人は、まず実経をとくべし。不輕菩薩

まつだい

ぼんぷ

あくどう

まぬか

のごとし。また末代の凡夫は、なにとなくとも悪道を免れ

難

おな

あくどう

お

ほけきよう

んことはかたかるべし。同じく悪道に墮つるならば、法華経

しんごんしゅう

にほんこく

ふた

なが

とうじ

かくのごとし。真言宗には、日本国に二つの流れあり。東寺

しんごん

ほけきよう

けごんぎよう

の真言は「法華経は華嚴経におとれり。いかにいわんや

だいにちきよう

てんだい

しんごん

だいにちきよう

ほけきよう

大日経においてをや」。天台の真言には「大日経と法華経

り
さいとう

いん

しんごんとう

ちようか

うんぬん

とは、理は斉等なり。印・真言等は超過せり」と云々。こ

みなあくどう

お

れらは皆悪道に堕つべしや。

こた

い

しゅう

立

きようぎよう

しやうれつ

はん

ふた

答えて云わく、宗をたて経々の勝劣を判ずるに、二つ

ぎ

いち

じは

に

のうは

いち

じは

ほか

ぎ

の義あり。一は似破、二は能破なり。一に似破とは、他の義

よ

思

破

しやうぎ

ふんみよう

は吉しとおもえども、これをはす。かの正義を分明に

顕

に

のうは

じつ

たにん

ぎ

すぐ

あらわさんがためか。二に能破とは、実に他人の義の勝れ

たるをば弁えずして、迷つて我が義すぐれたりとおもいて、
わきま まよ われ ぎ 勝 思
しんちゆう は のうは

心中よりこれを破するをば能破という。されば、彼の
しゆうじゆう そし じは のうは ふた ぎ しんちゆう

宗々の祖師に、似破・能破の二つの義あるべし。心中に
ほけきよう しよきよう すぐ おも い

は法華経は諸経に勝れたりと思えども、しばらく違して
ほけきよう ぎ あらわ 思 破

法華経の義を顕さんとおもいて、これをはすることあり。
だいばだつた あじやせおう もろもろ げどう ほとけ 敵

提婆達多・阿闍世王・諸の外道が仏のかたきとなりて
ぶつとく あらわ のち ほとけ き じつ ほんぷ

仏徳を顕し、後には仏に帰せしがごとし。また実の凡夫が
ほとけ あくどう お おお

仏のかたきとなりて悪道に墮つることこれ多し。
しよしゆう そし なか えしん ふで 書

されば、諸宗の祖師の中に回心の筆をかかずば、謗法の
ほうぼう

もの あくどう

お

知

さんろん

かじよう

けごん

ちようかん

者、悪道に堕ちたりとしるべし。三論の嘉祥、華嚴の澄観、

ほつそう

じおん

とうじ

こうぼうとう

えしん

ふで

法相の慈恩、東寺の弘法等は、回心の筆これあるか。よく

たず

習

よく尋ねならうべし。

と

い

こんどしようじ

離

思

問うて云わく、まことに今度生死をはなれんとおもわん

厭

ねが

に、なにものをかいとい、なにものをか願うべきや。

こた

もろもろ

きようもん

によにんとう

厭

見

答う。諸の經文には女人等をいとうべしとみえたれど

そうりんさいご

ねはんぎよう

い

ぼさつ

み

むりよう

も、双林最後の涅槃經に云わく「菩薩は、この身に無量の

かげん

ぐそくじゆうまん

み

ねはんぎよう

じゆじ

過患の具足充滿すと見るといえども、涅槃經を受持せんと

ほつ

ゆえ

しようご

ぼうしよう

欲せんがための故に、なおよく將護して乏少ならしめず。

ぼさつ

あくぞうとう

こころ

くふ

あくちしき

菩薩は、悪象等においては心に恐怖なく、悪知識において

ふい

こころ

しょう

なに

ゆえ

あくぞうとう

は怖畏の心を生ず。何をもつての故に。この悪象等はた

よ

み

やぶ

こころ

やぶ

あ

あくちしき

だ能く身を壊るのみにして、心を壊ること能わず、悪知識

ふた

やぶ

ゆえ

あくぞう

いっしん

やぶ

は二つともに壊るが故に。悪象のごときはただ一身を壊る

あくちしき

むりよう

み

むりよう

ぜんしん

やぶ

あくぞう

のみにして、悪知識は無量の身、無量の善心を壊る。悪象に

ころ

さんしゅ

いた

あくゆう

ころ

かなら

さんしゅ

いた

殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至

とううんぬん

きようもん

こころ

ごせ

ねが

ひと

いっさい

る」等云々。この経文の心は、後世を願わん人は一切の

あくえん

おそ

いっさい

あくえん

あくちしき

恐

悪縁を恐るべし、一切の悪縁よりは悪知識をおそるべしと

見

みえたり。

だいしょうこんぶつ

まつ

よ

びく

みずか

あくほう

されば、大莊嚴仏の末の四たりの比丘は、自ら惡法を

ぎよう

じつぼう

だいあびぎごく

ふ

ろつびやくしまんおくにん

行じて十方の大阿鼻地獄を経るのみならず、六百四万億人

だんなとう

じつぼう

じごく

お

おうくつまら

まにばつだ

の檀那等をも十方の地獄に墮としぬ。鵞崛摩羅は、摩尼跋陀

おし

したが

くひやくくじゅうくにん

ゆび

けつく

はは

が教えに随つて九百九十九人の指をきり、結句、母ならび

ほとけ

害

擬

ぜんしやうびく

ほとけ

みこ

じゅうにぶきやう

に仏をがいせんとぎす。善星比丘は、仏の御子、十二部經

じゆじ

しぜんじやう

得

よつかい

けつ

だん

くとか

を受持し、四禪定をえ、欲界の結を断じたりしかども、苦得

げどう

ほう

なら

しやうじん

あびじごく

お

だいば

外道の法を習つて、生身に阿鼻地獄に墮ちぬ。提婆が

ろくまんぞう

はちまんぞう

あん

げどう

ごほう

ぎよう

六万蔵・八万蔵を暗にしたりしかども、外道の五法を行じ

げん

むけん

お

あじやせおう

ちち

ころ

はは

がい

て、現に無間に墮ちにき。阿闍世王の父を殺し母を害せん

ぎ だいぞう はな ほとけ 失

と擬せし、大象を放つて仏をうしないたてまつらんとせし

あくし だいば おし くぎやりびく しやりほつ もくれん 謗

も、悪師・提婆が教えなり。俱伽利比丘が舍利弗・目連をそし

しょうじん あび だ だいぞくおう ごじく ぶつぼうそう 滅

りて生身に阿鼻に墮せし、大族王の五竺の仏法僧をほろぼ

だいぞくおう しゃてい かしゆみらくく おう けんだらこく

せし、大族王の舎弟は加濕弥羅国の王となりて健駄羅国の

そとば じとういつせんろつぴやくしよ 失 こんにくくおう ぶつぼう

率都婆・寺塔一千六百所をうしないし、金耳国王の仏法を

滅 はるりおう くせんくじゅうまん ひと ち

ほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万人の人をころして血な

いけ せつしょうかおう ぶつぼう ほろ ぼだいじゆ 切

がれて池をなせし、設賞迦王の仏法を滅ぼし菩提樹をきり

ね 掘 しゅう うぶんおう しせんろつぴやくよしよ じいん うしな

根をほりし、周の宇文王の四千六百余所の寺院を失い

にじゅうろくまんろつぴやくよ そうに げんぞく みな あくし

二十六万六百余の僧尼を還俗せしめし、これらは皆、悪師を

信じ、悪鬼その身に入りし故なり。

と

あつき

み い

ゆえ

げどう

ぶつぼう

問うて云わく、天竺・震旦は、外道が仏法をほろぼし、

しょうじよう

だいじよう

破

見

にほんこく

小乗が大乗をやぶるとみえたり。この日本国もしかるべ

きか。

こた

い

がつし

しな

げどう

しょうじよう

答えて云わく、月支・戸那には外道あり、小乗あり。

にほんこく

げどう

しょうじよう

もの

きでんはかせとう

この日本国には外道なし、小乗の者なし。紀伝博士等こ

ぶつぼう

かたき

しょうじよう

さんしゅう

れあれども、仏法の敵となるものこれなし。小乗の三宗

か

しゅう

もち

しょうじ

離

思

これあれども、彼の宗を用いて生死をはなれんとおもわず、

だいじよう

こころ 得

さいかく

ただ大乘を心うる才覚とおもえり。

くに

だいじよう

ごしゆう

ひとびとみな

ただし、この国には大乘の五宗のみこれあり。人々皆

思

か

しゅうじゆう

しやうじ

離

思

おもえらく、彼の宗々にして生死をはなるべしとおもう

ゆえ

争

おお

出

だんな

きえ

おお

故に、あらそいも多くいできたり、また檀那の帰依も多く

りよう

こころ

深

あるゆえに、利養の心もふかし。

だいし

ぎようじゃぶつぽう

ひろ

ようじん

あ

第四に行者仏法を弘むる用心を明かさば、

そ

ぶつぽう

弘

思

かなら

ごぎ

そん

夫れ、仏法をひろめんとおもわんものは、必ず五義を存

しやうほう

ごぎ

いち

きよう

に

き

して正法をひろむべし。五義とは、一には教、二には機、

さん

じ

し

こく

ご

ぶつぽうる

ふ

ぜんご

三には時、四には国、五には仏法流布の前後なり。

だいいち きよう

によらいちだいごじゅうねん

せつきよう

だいしろう

ごんじつ

第一に教とは、如来一代五十年の説教は大小・権実・

けんみつ さべつ

顕密の差別あり。

けこんしゅう

ごきよう

た

いちだい

収

なか

華嚴宗には五教を立てて一代をおさめ、その中には

けこん

ほっけ

さいしろう

けこん

ほっけ

なか

けこんぎよう

華嚴・法華を最勝とし、華嚴・法華の中に華嚴経をもつて

だいいち

なんさんほくしち

けこんしゅう

そし

にほんこく

とうじ

第一とす。南三北七ならびに華嚴宗の祖師、日本国の東寺の

こうぼうだいし

ぎ

弘法大師この義なり。

ほつそうしゅう

さんじ

いちだい

収

なか

じんみつ

ほけきよう

法相宗は三時に一代をおさめ、その中に深密・法華経を

いちだい

しろうぎよう

勝

じんみつ

ほっけ

なか

ほけきよう

一代の聖教にすぐれたりとす。深密・法華の中に、法華経

りようぎきよう

なか

ふりようぎきよう

じんみつきよう

りようぎきよう

なか

は了義経の中の不了義経、深密経は了義経の中の

りようぎきよう

了義經なり。

さんろんしゅう

にぞうさんじ

た

さんじ

なか

だいさん

三論宗にまた二藏三時を立つ。三時の中の第三の

ちゅうどうきよう

はんやや

ほつけ

はんやや

ほつけ

なか

はんややさい

中道教とは、般若・法華なり。般若・法華の中には般若最

だいいち

第一なり。

しんごんしゅう

にほんこく

ふた

なが

とうじりゅう

真言宗には日本国に二つの流れあり。東寺流は、

こうぼうだいし

じゅうじゅうしん

た

だいはちほつけ

だいくけごん

だいじゅうしんごん

弘法大師、十住心を立て、第八法華・第九華嚴・第十真言。

ほけきよう

だいにちきよう

おと

けごんぎよう

くだ

法華經は大日經に劣るのみならず、なお華嚴經に下るなり。

てんだい

しんごん

じかくだいしとう

だいにちきよう

ほけきよう

こう

りやく

天台の真言は、慈覚大師等、大日經と法華經とは広・略の

い

ほけきよう

りひみつ

だいにちきよう

じりくみつ

異、法華經は理秘密、大日經は事理俱密なり。

じようどしゆう

しようどう

じようど

なんぎよう

いぎよう

ぞうぎよう

しようぎよう

浄土宗には、聖道・浄土、難行・易行、雑行・正行

た

じようど

さんぶきよう

ほか

ほけきようとう

いつさいきよう

を立てたり。浄土の三部経より外の法華経等の一切経は、

なんぎよう

しようどう

ぞうぎよう

難行・聖道・雑行なり。

ぜんしゆう

ふた

なが

いちりゆう

いつさいきよう

いつさい

しゆう

禅宗には二つの流れあり。一流は、一切経・一切の宗

じんぎ

ぜんしゆう

いちりゆう

によらいいちだい

しようぎよう

みなごんせつ

の深義は禅宗なり。一流は、如来一代の聖教は皆言説、

によらい

くりん

ほうべん

ぜんしゆう

によらい

いみつ

ごんせつ

如来の口輪の方便なり。禅宗は如来の意密、言説におよば

きようげ

べつでん

ず教外の別伝なり。

くしやしゆう

じようじつしゆう

りつしゆう

しようじようしゆう

てんじく

しんたん

俱舍宗・成実宗・律宗は小乗宗なり。天竺・震旦に

しようじようしゆう

もの

だいじよう

は

おお

にほんこく

は小乗宗の者、大乘を破することこれ多し。日本国に

はその義^ぎなし。

と い しよしゅう い ぎ まちまち いちいち いわ
問うて云わく、諸宗の異義区なり。一々にその謂れあ

りて、得道^{とくどう}をなるべきか。また、諸宗^{しよしゅう}、皆謗法^{みなほうぼう}となりて、

一宗^{いっしゅう}ばかり正義^{しょうぎ}となるべきか。

こた い いろん そうい みなとくどう
答えて云わく、異論・相違ありといえども、皆得道なる

か。仏^{ほとけ}の滅後四百年にあたりて、健駄羅国^{けんだらこく}の迦式色迦王^{かにしかおう}、

ぶつぼう たつと いちげ そう く ぶつぼう 問 いちいち そう
仏法を貴み、一夏、僧を供し仏法をといしに、一々の僧、

い ぎ おお おうふしん い ぶつせつ さだ いち
異義多し。この王不審して云わく「仏説は定めて一ならん」

と。つ い きようそんじや と そんじやこた い こんじよう お
終に脇尊者に問う。尊者答えて云わく「金杖を折つ

て種々の物につくるに、
しゆじゆ もの かたち 形は別なれども金杖は一なり。
かたち こと

形の異なるをば諍うといえども、
あらそ こと 金たることをあらそわ
もんもんふどう

ず。門々不同なれば、
入 角 いりかどをば諍えども、入る理は一
あらそ

なり」等云々。また求那跋摩云わく「諸論各端を異にす
とううんぬん ぐなばつまい しょうんおのおのたん こと

れども、修行せば理に二無し。偏執せば是非有り。達せ
しゆぎよう り にな へんしゆう ぜ ひ あ たつ

ば違諍無し」等云々。また、五百羅漢の真因各異なれど
いじよう な とううんぬん ごひやくらかん しんいんおのおのこと

も、同じく聖理をえたり。大論の四悉檀の中の対治悉檀、
おな しょうり だいろん ししつだん なか たいじしつだん

撰論の四意趣の中の衆生意樂意趣、これらは、この善を嫌
しょうろん しいしゆ なか しゆじよういぎよういしゆ ぜん きら

いこの善をほむ。檀・戒・進等、一々にそしり一々にほむ
ぜん 讃 だん かい しんとう いちいち 謗 いちいち

みなとくどう

成

おも

ごほう

る、皆得道をなる。これらをもつてこれを思うに、護法・

しょうべん

ちこう

かいげん

くう

ちゅう

なんさんほくしち

とん

ぜん

清弁のあらそい、智光・戒賢の空・中、南三北七の頓・漸・

ふじよう

いちじ

にじ

さんじ

しじ

ごじ

ししゅう

ごしゅう

ろくしゅう

不定、一時・二時・三時・四時・五時、四宗・五宗・六宗、

てんだい

ごじ

けごん

ごきよう

しんごんきよう

とうじ

てんだい

あらそ

天台の五時・華嚴の五教、真言教の東寺・天台の諍い、

じようどしゅう

しようど

じようど

ぜんしゅう

きようげ

きようない

い

かど

さべつ

浄土宗の聖道・浄土、禪宗の教外・教内、入り門は差別

じつり

い

いち

せりというとも、実理に入ることとはただ一なるべきか。

なん

い

けごん

ごきよう

ほつそう

さんろん

さんじ

ぜんしゅう

難じて云わく、「華嚴の五教、法相・三論の三時、禪宗の

きようげ

じようどしゅう

なんぎよう

いぎよう

なんさんほくしち

ごじとう

もん

異

教外、浄土宗の難行・易行、南三北七の五時等、門はこと

い

り

いち

みなぶつ

い

かな

ほうぼう

なりといえども、入る理は一にして皆仏意に叶い謗法とな

ほうぼう

ほうぼう

らず」といわば、謗法ということあるべからざるか。謗法と

ほう そむ

ほう そむ もう

しょうじよう

は、法に背くということなり。法に背くと申すは、小乗は

しょうじようきよう そむ

だいじよう だいじようきよう そむ

ほう そむ

小乗経に背き、大乘は大乘経に背く。法に背かば、

ほうぼう

ほうぼう

くか 招

あに謗法とならざらん。謗法とならば、なんぞ苦果をまねか

どうり

ざらん。この道理にそむく。これひとつ。

だいはんにやきよう

い

はんにや

ぼう

もの

じつぼう

だいあびじごく

大般若経に云わく「般若を謗ずる者は、十方の大阿鼻地獄

お

ほけきよう

い

ひとしん

ないし

に墮つべし」。法華経に云わく「もし人信ぜずして乃至その

ひと みようじゆう

あびごく い

ねはんぎよう

い

よ

人は命終して、阿鼻獄に入らん」。涅槃経に云わく「世に

なんじ やまいみつ

いち

しじゅう

に

ごぎやく

さん

ぼう

難治の病三つあり。一には四重、二には五逆、三には謗

だいじよう

きようもん

虚

大乘なり」。これらの経文あにむなしかるべき。これらは

しようもん

証文なり。

むくろんじ

だいまんばらもん

きれんぜんじ

すうりようほっしとう

されば、無垢論師・大慢婆羅門・熙連禅師・嵩靈法師等

しようほう

ぼう

げんしん

だいあびじごく

お

したこうちゅう

ただ

は、正法を謗じて、現身に大阿鼻地獄に堕ち、舌口中に爛

げんしよう

れたり。これは現証なり。

てんじんぼさつ

しようじよう

ろん

つく

しよだいじようきよう

破

のち

天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘経をはしき。後

むじやくぼさつ

たい

つみ

さんげ

した き

に無著菩薩に對して、この罪を懺悔せんがために舌を切ら

悔

たま

ほうぼう

つみ

せんぶ

んとくい給いき。謗法もし罪とならずば、いかんが千部の

ろんじ さんげ

せんだい

てんじく

ことば

ふしん

論師、懺悔をいたすべき。闡提とは天竺の語、ここには不信

ほん

ふしん

いつさいしゅじょうしつうぶつしろう

しん

せんだい

と翻ず。不信とは、「一切衆生悉有仏性を信ぜざるは、闡提

ひと

み

ふしん

ほうぼう

もの

ごうが

しちしゅ

の人」と見えたり。不信とは謗法の者なり。恒河の七種の

しゅじょう

だいいち

いつせんだいほうぼう

じょうもつ

もの

だいに

ごぎやく

衆生の第一は、一闡提謗法、常没の者なり。第二は、五逆

ほうぼう

じょうもつとう

もの

ほうぼう

恐

謗法、常没等の者なり。あに謗法をおそれざらん。

こた

い

ほうぼう

よし

ぶつぼう

ぼう

ほうぼう

答えて云わく、謗法とは、ただ由なく仏法を謗ずるを謗法

わ

しゅう

立

よほう

ぼう

ほうぼう

というか。我が宗をたてんがために余法を謗ずるは、謗法

しょうろん

しいしゅ

なか

しゅじょういぎよういしゅ

にあらざるか。摂論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは、

ひと

いっしろう

あいだいちぜん

しゅ

あく

つく

たとい人ありて一生の間一善をも修せず、ただ悪を作る

もの

しようえん

ぜん

者あり、しかるに、小縁にあいて、いずれの善にてもあれ

いちぜん

しゅ

もう

ずいき

さんたん

ぜんにん

一善を修せんと申す。これは随喜・讃歎すべし。また善人あ

いっしょう

あいだ

いちぜん

しゅ

ほか

ぜん

移

り、一生の間ただ一善を修す。しかるを、他の善へうつさ

善

謗

いちじ

なか

んがために、そのぜんをそしる。「二事の中において、ある

せ

ほ

だいろん

ししつだん

いは呵め、あるいは讃む」という、これなり。大論の四悉檀

なか

たいじしつだん

同

じようみようきよう

だんか

もう

の中の対治悉檀、またこれおなじ。浄名経の弾呵と申す

あごんきよう

とき讃

ほう

謗

は、阿含経の時ほめし法をそしるなり。

思

しゅじようおお

しようじよう

き

これらをもつておもうに、あるいは衆生多く小乗の機

だいじよう

そし

しようじようきよう

しんじん

増

あれば大乘を謗つて小乗経に信心をまし、あるいは

しゅじようおお だいじよう き しようじようきよう 謗 だいじようきよう

衆生多く大乘の機なれば小乗經をそしりて大乘經

しんじん 厚 しゅじようみだぶつ えん しょほう

に信心をあつくす。あるいは衆生弥陀仏に縁あれば諸仏を

みだ しんじん 増 しゅじようおお じぞう

そしりて弥陀に信心をまさしめ、あるいは衆生多く地蔵に

えん もろもろ ぼさつ じぞう 讃 しゅじよう

縁あれば諸の菩薩をそしりて地蔵をほむ。あるいは衆生

おお けこんぎよう えん しょきよう けこんぎよう

多く華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經をほむ。ある

しゅじようだいはんにやきよう えん しょきよう だいはんにやきよう

いは衆生大般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經

しゅじようほけきよう しゅじようだいにしきようとう

をほむ。あるいは衆生法華經、あるいは衆生大日經等、

おな こころ得 き み ほ そし

同じく心うべし。機を見て、あるいは讃め、あるいは毀る。

とも ほうぼう き 知 もの

共に謗法とならず。しかるを、機をしらざる者、みだりに、

あるいは讃め、あるいは皆るは、謗法となるべきか。例せ

けごんしゅう さんろん ほつそう てんだい しんごん ぜん じょうどう しょし

ば、華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禅・浄土等の諸師の

しよきよう 破 わ しゅう た ほうぼう

諸經をはして我が宗を立つるは、謗法とならざるか。

なん い しゅう た しよきよう しょしゅう は ぶつぼさつ

難じて云わく、宗を立つるに諸經・諸宗を破し、仏菩薩

ほ ぶつぼさつ は ほか ぜんこん しゅ

を讃むるに仏菩薩を破し、他の善根を修せしめんがために

ぜんこん 破 苦 あごんどう もろもろ

この善根をはする、くるしからずば、阿含等の諸の

しようじよきよう けごんきよう しょうだいじよきよう 破 もん

小乗經に華嚴經等の諸大乘經をはしたる文ありや。

けごんきよう ほつけ だいにちきようとう しょうだいじよきよう もん

華嚴經に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる文、これ

ありや。

こた

い

あごん

しようじようきよう

しよだいじようきよう

破

答えて云わく、阿含の小乗経に諸大乘経をはしたる

もん

文はなけれども、華嚴経には二乗・大乘・一乗をあげて

にじよう

だいじよう

破

ねはんぎよう

しよだいじようきよう

ねはんぎよう

二乗・大乘をはし、涅槃経には諸大乘経をあげて涅槃経

たい

破

みつごんきよう

いつさいきよう

なか

おう

に對してこれをはす。密嚴経には「一切経の中の王なり」

説

むりようぎきよう

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

ととき、無量義経には「四十余年にはいまだ眞実を顯さず」

説

あみだきよう

ねんぶつ

たい

しよきよう

しようぜんこん

ととかれ、阿弥陀経には念仏に對して諸経を「小善根」

説

れい いち

ゆえ

か

きようぎきよう

ととかる。これらの例、一にあらず。故にまた、彼の経々

にんし みな

ぎ そん

おも

しゅう

による人師、皆この義を存せり。これらをもつて思うに、宗

た

かた

わ

しゅう

たい

しよきよう

は

苦

を立つる方は、我が宗に對して諸経を破するはくるしか

らざるか。

なん

い

けこんぎよう

しょうじよう

だいじよう

いちじよう

挙

難じて云わく、華嚴経には小乗・大乘・一乗とあげ、

みつこんぎよう

いつさいきよう

なか

おう

説

ねはんぎよう

密厳経には「一切経の中の王なり」ととかれ、涅槃経に

もろもろ

だいじよう

挙

あみだきよう

ねんぶつ

たい

は「この諸の大乘」とあげ、阿弥陀経には念仏に対して

しよきよう

しょうぜんこん

説

むりようぎきよう

諸経を「小善根」とはとかれたれども、無量義経のごと

しじゅうよねん

ねんげん

さ

あいだ

だいぶ

しよきよう

く、四十余年と年限を指して、その間の大部の諸経、

あごん

ほうどう

はんにや

けごんとう

な

しょうれつ

説

阿含・方等・般若・華嚴等の名をよびあげて勝劣をとける

ねはんぎよう

もろもろ

だいじよう

もん

こと、これなし。涅槃経の「この諸の大乘」の文ばかり

そうりんさいご

きよう

もろもろ

だいじよう

説

こそ、双林最後の経として「この諸の大乘」ととかれ

ねはんぎよう

いつさいきよう

きら

覚

たれば、涅槃經には一切經は嫌わるかとおぼうれども、「こ

もろもろ

だいじようきよう

あ

つぎしも

しよだいじようきよう

つら

の諸の大乗經」と挙げて、次下に諸大乘經を列ねた

じゆうにぶ

しゆたら

ほうどう

はんにやとう

むりようぎきよう

るに、十二部・修多羅・方等・般若等とあげたり。無量義經・

ほけきよう

の

むりようぎきよう

あ

法華經をば載せず。ただし、無量義經に挙ぐるところは、

しじゆうよねん

あごん

ほうどう

はんにや

けこんぎきよう

四十余年の阿含・方等・般若・華嚴經をあげたり。いまだ

ほけきよう

ねはんぎきよう

しやうれつ

みつごん

いつさいききよう

なか

おう

法華經・涅槃經の勝劣はみえず。密嚴に「一切經の中の王

いつさいききよう

なか

けごん

しやうまん

なり」とはあげたれども、一切經をあぐる中に華嚴・勝鬘

とう

な

いつさいききよう

なか

おう

説

ゆえ

等の諸經の名をあげて「一切經の中の王なり」ととく故に、

ほけききようとう

あみだききよう

しやうぜんこん

じせつ

法華經等とはみえず。阿弥陀經の「小善根」は、時節もな

しょうぜんこん そうみよう

誰 知

しょうじようきよう

し、小善根の相貌もみえず。たれかする、小乗経を

しょうぜんこん

にんてん ぜんこん しょうぜんこん

小善根というか、また人天の善根を小善根というか、ま

かんぎよう

そうかんぎよう と

しよぜん しょうぜんこん

た観経・双観経の説くところの諸善を小善根というか。

いちだい

ねんぶつ

たい

しょうぜんこん

聞

いまだ一代を念仏に対して小善根というとはきこえず。ま

だいにちきよう

ろくはらみつきようとう

もろもろ

ひきよう

なか

いちだい

た大日経・六波羅蜜経等の 諸の秘教の中にも、一代の

いっさいきよう

きら

きよう

讃

もん

一切経を嫌ってその経をほめたる文はなし。

むりようぎきよう

さきしじゅうよねん

しよきよう

きら

ただし、無量義経ばかりこそ、前四十余年の諸経を嫌い

ほけきよういつきよう

かぎ

いせつ

しじゅうよねん

こんせつ

むりようぎきよう

法華経一経に限って、已説の四十余年、今説の無量義経、

とうせつ

みらい

説

ねはんぎよう

きら

ほけきよう

讃

当説の未来にとくべき涅槃経を嫌って、法華経ばかりをほ

めたり。

しゃかによらい かこ げんざい みらい さんぜ しょぶつ よ 出 たま
釈迦如来、過去・現在・未来の三世の諸仏、世にいで給い

おのおのいつさいきよう

と

たも

ほとけ

ほけきようだいいち

て各々一切経を説き給うに、いずれの仏も法華経第一な

れい

じようろう

かろう

ふじよう

いなか

ひやくししよう

り。例せば、上郎・下郎は不定なり。田舎にしては百姓・

ろうじゆうとう

さむらい

じようろう

らくよう

げんぺいとう いげ

郎従等は侍を上郎という。洛陽にして源平等已下を

げろう

さんけ

じようろう

しゅ

おう

下郎という。三家を上郎という。また主を王といわば、

ひやくししよう

たくちゆう

おう

じとう

りようけとう

むら

さと

こおり

くに

百姓も宅中の王なり。地頭・領家等また村・郷・郡・国

おう

だいおう

の王なり。しかれども大王にはあらず。

しようじようきよう

む いねはん

り

おう

しようじよう

かい

じようとう

小乗経には無為涅槃の理、王なり。小乗の戒・定等

たい

ちえ

おう

しよだいじようきよう

ちゅうどう

り

おう

に對して、智慧は王なり。諸大乘經には中道の理、王な

けこんぎよう

えんゆうそうそく

おう

はんにやきよう

くうり

おう

り。また華嚴經は円融相即の王、般若經は空理の王、

だいじつきよう

しゅごしようほう

おう

やくしきよう

やくしによらい

べつがん

と

大集經は守護正法の王、藥師經は藥師如来の別願を説く

きよう

なか

おう

そうかんぎよう

あみだぶつ

しじゅうはちがん

と

きよう

なか

經の中の王、双觀經は阿弥陀仏の四十八願を説く經の中

おう

だいにちきよう

いん

しんこん

と

きよう

なか

おう

いちだいいつさいきよう

の王、大日經は印・真言を説く經の中の王、一代一切經

おう

ほけきよう

しんたい

ぞくたい

くう

け

ちゅう

いん

の王にはあらず。法華經は真諦・俗諦、空・仮・中、印・

しんこん

むい

り

じゅうにだいがん

しじゅうはちがん

いつさいしよきよう

と

真言、無為の理、十二大願、四十八願、一切諸經の説くと

しよせん

ほうもん

だいおう

きよう

知

もの

ころの所詮の法門の大王なり。これは教をしれる者なり。

ぜんむい

こんごうち

ふくう

ほうぞう

ちようかん

じおん

しかるを、善無畏・金剛智・不空・法蔵・澄觀・慈恩・

かじよう なんさんほくしち どんらん どうしやく ぜんどう だるまとう わ た

嘉祥・南三北七・曇鸞・道綽・善導・達磨等の我が立つる

えきよう いちだいだいichi きよう 知 もの

ところの依経を一代第一といえるは、教をしらざる者なり。

いつさい にんし なか てんだいちしやだいしいちにん きよう

ただし、一切の人師の中には、天台智者大師一人、教をし

ひと どんらん どうしやくとう しようどう じようど ぞうぎよう いぎよう

れる人なり。曇鸞・道綽等の聖道・浄土、難行・易行、

しようぎよう ぞうぎよう みなもと じゆうじゆうびばしやろん よ か ほんろん

正行・難行は、源、十住毘婆沙論に依る。彼の本論に

なんぎよう うち ほつけ しんごんとう い おも びやくあん ろんしゆ

難行の内に法華・真言等を入ると謂うは僻案なり。論主の

こころ ろん しちゆうじゆう とが じ おん じんみつきよう

心と、論の始中終をしらざる失あり。慈恩が深密経の

さんじ いちだい 撰 ほんきよう さんじ いつさいきよう

三時に一代をおさめたること、また本経の三時に一切経

おさ 知 とが ほうぞう ちようかんとどう ごきよう

の撰まらざることをしらざる失あり。法蔵・澄観等が、五教

いちだい

なか

ほけきよう

けこんぎよう

えんきよう

た

に一代をおさむる中に法華経・華嚴経を円教と立て、また

けこんぎよう

ほけきよう

すぐ

思

よ

華嚴経は法華経に勝れたりとおもえるは、依るところの

けこんぎよう

にじようさぶつ

くおんじつじよう

明

きしよう

くじよう

華嚴経に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小・久成あ

けこん

ちようか

ほけきよう

わ

きよう

おと

おも

りとおもい、華嚴よりも超過の法華経を我が経に劣ると謂

びやつけん

さんろん

かじよう

にぞうとう

ほけきよう

うは、僻見なり。三論の嘉祥の二蔵等、また法華経に

はんにやきよう

勝

思

びやくあん

ぜんむいとう

般若経すぐれたりとおもうことは、僻案なり。善無畏等の

だいにちきよう

ほけきよう

すぐ

ほけきよう

こころ

知

大日経は法華経に勝れたりという、法華経の心をしらざ

だいにちきよう

知

もの

るのみならず、大日経をもしらざる者なり。

と

い

みなほうぼう

あくどう

お

問うて云わく、これら皆謗法ならば、悪道に堕ちたるか、

いかん。

こた

い

ほうぼう

じょう

ちゅう

げ

ぞう

ほうぼう

じおん

答えて云わく、謗法に上・中・下・雑の謗法あり。慈恩・

かじよう

ちようかんとう

ほうぼう

じょう

ちゅう

ほうぼう

うえ

じしん

嘉祥・澄観等が謗法は、上・中の謗法か。その上、自身も

ほうぼう

知

く

かえ

ふで

たし

謗法としれるかのあいだ、悔い還す筆これあるか。また他師

破

ふた

のうは

じは

きよう

勝

をはするに二つあり。能破・似破これなり。教はまさりと

知

ぜひ

顕

ほう

破

じは

しれども、是非をあらわさんがために法をはす。これは似破

のうは

じつ

きよう

おと

思

なり。能破とは、実にまされる経を劣れるとおもってこれ

破

あくのうは

げん

劣

破

をはす。これは悪能破なり。また現におとれるをはす。こ

ぜんのうは

れ善能破なり。

きようそんじや

こんじよう

たと

しようじようきよう

おお

ただし、脇尊者の金杖の譬えは、小乗経は多しとい

おな

く

くう

むじよう

むが

り

しよにんおな

えども、同じく苦・空・無常・無我の理なり。諸人同じく

ぎ

そん

じゆうはちぶ

にじゆうぶそうじようろん

もん

この義を存して十八部・二十部相諍論あれども、ただ門の

あらそ

り

あらそ

ゆえ

とも

ほうぼう

諍いにて理の諍いにはあらず。故に、共に謗法とならず。

げどう

しようじようきよう

は

げどう

り

じようじゆう

外道が小乗経を破するは、外道の理は常住なり、

しようじようきよう

り

むじよう

くう

ゆえ

げどう

しようじようきよう

小乗経の理は無常なり空なり。故に、外道が小乗経を

破

ほうぼう

だいじようきよう

り

ちゆうどう

しようじようきよう

はするは謗法となる。大乘経の理は中道なり、小乗経

くう

しようじようきよう

もの

だいじようきよう

破

ほうぼう

は空なり。小乗経の者の大乘経をはするは謗法となる。

だいじようきよう

もの

しようじようきよう

はほう

大乘経の者が小乗経をはするは破法とならず。

しよだいじようきよう

なか

り

みかいえ

り

きしよう

くじよう

諸大乘経の中の理は未開会の理、いまだ記小・久成こ

ほけきよう

り

かいえ

り

きしよう

くじよう

れなし。法華経の理は開会の理、記小・久成これあり。

しよだいじようきよう

もの

ほけきよう

破

ほうぼう

諸大乘経の者が法華経をはするは、謗法となるべし。

ほけきよう

もの

しよだいじようきよう

ぼう

ほうぼう

法華経の者の諸大乘経を謗ずるは、謗法となるべからず。

だいにかきよう

しんごんしゅう

みかいえ

きしよう

くじよう

ほけきよう

大日経・真言宗は、未開会にして記小・久成なくば、法華経

いぜん

かいえ

きしよう

くじよう

ゆる

ねはんぎよう

已前なり。開会にして記小・久成を許さば、涅槃経とおな

ぜんむいさんぞう

こんごうち

ふくう

いちぎようとう

しようあく

じ。ただし、善無畏三蔵・金剛智・不空・一行等の性悪の

ほうもん

いちねんさんぜん

ほうもん

てんだいちしや

ほうもん

盗

法門・一念三千の法門は、天台智者の法門をぬすめるか。

ぜんむいとう

ほうぼう

じは

ぞうほうぼう

もししからば、善無畏等の謗法は似破か、また雑謗法か。

ごひやくらかん しんいん しょうじょう じゅうにいんねん むみよう ぎよう

五百羅漢の真因は、小乗の十二因縁のとなり。無明・行

とう えん こうり い み もん あらそ ほうぼう

等を縁として空理に入ると見えたり。門は諍えども、謗法

しゅうろん しいしゅ だいろん ししつだんとう むじやくぼさつ

とならず。摂論の四意趣、大論の四悉檀等は、無著菩薩・

りゅうじゅぼさつ めつご んんじ ほけきよう いっさいきよう こころ

竜樹菩薩、滅後の論師として法華經をもつて一切經の心

得 ししつ しいしゅとう もち にぜん きようぎよう こころ はん

をえて、四悉・四意趣等を用いて爾前の經々の意を判ず

みかいえ しいしゅ ししつだん かいえ しいしゅ ししつだん

るなり。未開会の四意趣・四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を

どう ほうぼう 知 きよう

同ぜば、あに謗法にあらずや。これらをよくよくしるは、教

もの

をしれる者なり。

しく いち しん げ に げ しん

四句あり。一に「信じて解せず」、二に「解して信ぜず」、

三に「また信しんじまた解げす」、四に「信しんずるにあららず解げするにあららず」。

と い しん げ もの ほうほう
問うて云わく、「信じて解せず」の者は謗法なるか。

こた い ほけきよう い しん い
答えて云わく、法華經に云わく「信をもつて入ることを得

ととうんぬん ねはんぎよう く い
たり」等云々。涅槃經の九に云わく。

なん い ねはんぎようさんじゅうろく い われ かいきよう なか
難じて云わく、涅槃經三十六に云わく「我、契經の中に

と にしゆ ひとあ ぶつぼうそう ぼう いち ふしん
おいて説く。二種の人有り、仏法僧を謗ず。一には、不信に

しんに こころ ゆえ に しん ぎ げ
して瞋恚の心の故に。二には、信ずといえども義を解せざ

ゆえ ぜんなんし ひとしんじん ち え あ
るが故に。善男子よ。もし人信心あつて智慧有ることなき

は、この人は則ち能く無明を増長す。もし智慧有つて信心ひと すなわ よ むみよう ぞうちよう ち え あ しんじん
有ることなきは、この人は則ち能く邪見を増長す。善男子あ ひと すなわ よ じゃけん ぞうちよう ぜんなんし
よ。不信の人は、瞋恚の心の故に、説いて仏法僧の宝有るふしん ひと しんに こころ ゆえ と ぶつぼうそう たからあ
ことなしと言わん。信ずる者にして慧無きは、顛倒して義をい しん もの えな てんどう ぎ
解するが故に、法を聞く者をして仏法僧を謗ぜしむ」等云々。
この二人の中には「信じて解せず」の者を謗法と説く、いににん なか しん げ もの ほうぼう と
かん。

答えて云わく、この「信じて解せず」の者は、涅槃經のこた い しん げ もの ねはんぎよう
三十六に、恒河の七種の衆生の第二の者を説くなり。こさんじゅうろく ごうが しちしゆ しゅじよう だいに もの と

だいに もの ねはんぎよう いっさいしゅじよう

ぶつしようあ

の第二の者は、涅槃經の「一切衆生ことごとく仏性有り」

せつ き しん

ふしん もの

の説を聞いてこれを信ずといえども、また不信の者なり。

と い しん ふしん

問うて云わく、いかんぞ、信ずといえども不信なるや。

こた い いっさいしゅじよう

ぶつしようあ せつ

答えて云わく、「一切衆生ことごとく仏性有り」の説を

き しん ところ にぜん きよう よ

聞いてこれを信ずといえども、また心を爾前の經に寄す

いちるい しゅじよう むぶつしよう もの い

る一類の衆生をば、無仏性の者と云うなり。これ「信じて

しん もの

信ぜず」の者なり。

と い しょうもん

問うて云わく、証文いかん。

こた い ごうがだいに しゅじよう と い きよう い

答えて云わく、恒河第二の衆生を説いて云わく、經に云

だいねはんぎよう

き

え

しんじん

しよう

わく「かくのごとき大涅槃経を聞くことを得て信心を生ず

な

しゆつ

い

ぶつしよう

る、これを名づけて出となす」。また云わく「仏性はこれ

しゆじよう

あ

しん

かなら

いつさい

あ

衆生に有りと信ずといえども、必ずしも一切みなこれ有

ゆえ

な

しんふぐそく

もん

るにはあらずとす。この故に名づけて信不具足となす」文。

もん

くち

ねはん

しん

こころ

この文のごとくんば、口には涅槃を信ずといえども、心に

にぜん

ぎ

そん

もの

だいに

ひと

と

い

爾前の義を存する者なり。またこの第二の人を説いて云わ

しん

もの

えな

てんどう

ぎ

げ

ゆえ

く「信ずる者にして慧無きは、顛倒して義を解するが故に」

とううんぬん

てんどう

ぎげ

じつきよう

もん

え

ごんきよう

等云々。「顛倒して義を解す」とは、実経の文を得て権経

ぎ

こと

もの

の義を覚る者なり。

問うて云わく、と い「信じて解せず」のものの得道の文いかん。とくどう もん

こた いねはんぎよう さんじゆうに い ぼだい いん

答えて云わく、涅槃經の三十二に云わく「この菩提の因は

むりよう

しんじん と

おき っ

また無量なりといえども、もし信心を説かば、すでに摂め尽

もん

く

きよう

き

お

くす」文。九に云わく「この經を聞き已わつて、ことごと

ぼだい

いんねん

な

く菩提の因縁と作る。

ほつしよう

こうみよう

もうく

い

もの

ひつじよう

まさ

法声・光明、毛孔に入る者は、必定して当に

あのくたらさんみやくさんぼだい

う

とううんぬん

ほけきよう

い

しん

阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云々。法華經に云わく「信

い

え

とううんぬん

をもつて入ることを得たり」等云々。

と

い

げ

しん

もの

問うて云わく、「解して信ぜず」の者はいかん。

こた　　ごうが　　だいいち　　もの
答う。恒河の第一の者なり。

と　　い　　しょうもん
問うて云わく、証文いかん。

こた　　い　　ねはんぎよう　　さんじゅうろく　　だいいち　　と　　い
答えて云わく、涅槃經の三十六に第一を説いて云わく

ひとあ　　き　　に　　き　　じようじゅう
ひとあ　　だいねはんぎよう　　き　　によらい　　じようじゅう

「人有つて、この大涅槃經を聞く。『如来は常住にして

へんにやくあ　　じようらくがじよう　　つ　　ひつきよう　　ねはん
へんにやくあ　　じようらくがじよう　　つ　　ひつきよう　　ねはん

変易有ることなく、常樂我淨なり。終に畢竟して涅槃に

い　　い　　ぶつしょうあ　　いっせんたい　　ひと
い　　い　　ぶつしょうあ　　いっせんたい　　ひと

入るにあらず。一切衆生ことごとく仏性有り。一闍提の人、

ほうどうきよう　　ぼう　　ごぎやくざい　　な　　しじゅうごん　　おか　　かなら　　まさ
ほうどうきよう　　ぼう　　ごぎやくざい　　な　　しじゅうごん　　おか　　かなら　　まさ

方等經を謗じ五逆罪を作し四重禁を犯すとも、必ず当に

ぼだい　　どう　　じよう　　う　　しゅだおん　　ひと　　しだごん　　ひと
ぼだい　　どう　　じよう　　う　　しゅだおん　　ひと　　しだごん　　ひと

菩提の道を成ずることを得べし。須陀洹の人、斯陀含の人、

あなごん　　ひと　　あらかん　　ひと　　しゃくしぶつ　　とう　　かなら　　まさ
あなごん　　ひと　　あらかん　　ひと　　しゃくしぶつ　　とう　　かなら　　まさ

阿那含の人、阿羅漢の人、辟支仏等、必ず当に

あのかたたらさんみやくさんぼだい じよう

う

ことば

阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし』と。この語を

き お

ふしん

こころ

しよう

とううんぬん

聞き已わつて、不信の心を生ず」等云々。

と

い

もん

ふしん

み

げ

問うて云わく、この文には「不信」と見えたり、「解して

しん

信ぜず」とは見えず、いかん。

み

こた

い

だいいち

けつもん

い

ち

えあ

しんじん

答えて云わく、第一の結文に云わく「もし智慧有つて信心

あ

有ることなきは、この人は則ち能く邪見を増長す」文。

ひと

すなわ

よ

じゃけん

ぞうちよう

もん